

MRgFUSはMRIと超音波装置を組み合わせた治療法で、MRIでリアルタイムに患部の位置と温度をモニタリングしながら、1024本の超音波を集束し（従来は208本）患部を焼灼する・・・標的可能部位は約2mmときわめて小さく、精度の高い焼灼をするために患部の位置決めが重要となる。また患部の温度が54度以上にならないと治療効果が出にくく、64度を超えると出血などリスクが高まるため、術前術中のMRIでのモニタリングを正確に行わなければならない。

事前検査で頭蓋骨密度比が低いと、超音波が通過しにくく、温度が上がりきらないことがある。この場合、何度も超音波を照射するが、患者さんへの負担が高くなるだけでなく、思うように治療効果が得られないこともある。とくに東洋人は頭蓋骨が厚く骨密度比が低い傾向にあるため、適用する症例を見極めなければ

ならない。

湘南藤沢病院はこの装置を昨年11月に導入し、今年から臨床研究を開始・・・本態性振戦10例に加え、振戦優位型のパーキンソン病10例、ジスキネジアを呈しているパーキンソン病10例を予定している。（被験者を募集中）



写真A

今回の患者さんは68歳時に上肢振戦で発症した73歳男性。5回目の照射を終えたところで、患者さんに手首を回転させる、親指と人差し指をタップさせるなどの運動をしてもらい運動障害の評価を行う（写真A）。・・・10回目の照射をし



写真B

て治療は終了。治療後にすぐ歩ける（写真B）。振戦だけでなく、筋強剛にも効果があったと評価された。治療後に局所的な脳浮腫が生じ、患者さんの動作が緩慢になったが、副腎皮質ホルモンを数日間用いることで軽快し、治療から14日目に自宅退院した。

* さらに詳しく知りたい方はウェブサイト

《徳洲新聞ダイジェスト》をご覧ください。

